明日への思想家 6

—ナショナルとインターナショナルを超克するために—

革命の実験家として

二・二六事件の民間指導者

□□□□ 鈴木正節

北一輝論

北一輝は、二・二六事件の民間指導者とされ、刑死したが、クーデタの理論的指導者であったのでなく、その思想が天皇制国家に対立するものがあったからである。もとより、コミンターン直流の共産主義のように、明白に「反天皇制」をうたい、権力との真正面からの激突の中で、敗北をきっしたのでなく、現実には国家のファシズム化を促す組織の思想として、大正後期以後の民間反革命団体の柱となっていたのである。にもかかわらず、二・二六事件の後、北一輝の思想は、天皇制国家の軍官僚によって、次のように断罪された。「…過激なる赤色団体の思想を、機関説に基く絶対尊皇の趣旨を以って擬装したるわが国体と全然相容れざる不逞思想」と。クーデタを指揮した青年将校に影響を与えた「日本改造法案」の作者は、天皇制を逆手にとった革命を夢想したが、中国へ、アジア会域へと戦争を拡大する他に、自己を維持しえなくなっていた天皇制国家の危機感の前に、敗れさった。今から三十四年前のことである。

北一輝は、明治十六年、佐渡に生れた。抜群の秀才として中学に進んだが、早熟の少年によくあるように、学課外の書物に熱中しその結果、落第した。家業の倒産の不運も相まって、中学四年で退学し、その後は、ますます好みの勉強に集中し、ロマン主義と社会主義にかぶれたあたかも、明治三十三年、与謝野夫妻の「明星」が創刊され、また、社会主義協会の成立する頃である。幼少年期に学んだ儒学と異質は世界に、北の胸中は喜びにうずき、同時に、この二つの反権威思想にひたる過程で後年の北の革命への夢想と構想が生じたのかもしれない。失恋の痛手をおい上京、独学者として図書館での集中的勉強の後北は、「国体論及び純正社会主義」という大著を出版した。退学後六年、二十三才の北は、当時の一流学者論客の絶賛を受けたが、その著作にうずまいている権威批判、ことに国体論批判は、日露戦後の保守家を驚かしついに発禁となる。この書物を契機に交渉が生じた幸徳、大杉堺らの社会主義者とは、日露戦争やインターショナルの評価の違いからさして、深く交らず、むしろ中国革命支援の団体である—革命評論社同人に近づき中国革命同盟会に入党する。大陸に思いをはせるロマンチックな考えより、禁書の著者として東京から追放される思いであったと考えられる。もとより漢学の教養故の洋学者である社会主義者への反発や革命運動の実践にふみ込みたい意志も、多分にあったであろう。ともあれ、もはや東京で論客となる道は、はばまれた。革命同盟会は、学者の集団でなく実践家の組織であって、著書が禁書となった北の挫折後の行動を規定するものであった。彼は、この秘密結社内の二潮流の対立を激化させ、自分は、孫文系の英米型政治思想に対立する、中国土着の教養保待者—宋教仁と交り、湖南派に加担する。彼は四十三年に黒竜会に関係し翌年の辛亥革命勃発にあっては、黒竜会派遣として中国に渡る。この当時、社会主義陣営は大逆事件の大弾圧にあって壊滅状態であった。北も引致されたが、すでに、社会主義者のグループよりも支那浪人や右翼結社に近かったので、釈放一歩早く、天皇制よりも混乱せる中国に眼を向けていたのである。この早い転向が、北を二・二六まで生かしていたといってよい。ところで、革命中国に渡った北は宋教仁の顧問になって奔走したが、宋の暗殺、さらに中国退去命令により、帰国。四ヵ月後、袁世凱に対する第二革命が失敗し、中国革命家が続々と亡命。北は、亡命客の世話をしつつ、辛亥革命についての考えをまとめた。この「支那革命外史」は、時の総理—大隈や政府、民間の重要人物にむけて、中国への熱烈な援助を訴えている。そこには、みずからの青春を賭け挫折した革命への北の情熱がおどっている。第三革命が起るや、北は再び中国にわたる上海でかっての盟友と連絡をとったが、ほとんど何もできず、法華経の朗誦を日課とした。宋教仁の死、革命の挫折、日支の対立状態など、北の苦悩の日々がつづいた。第三革命は袁の死により沈滞する。第一次大戦が終結し、ロシヤに革命が起り中国は排日運動の渦となる。かかる情況にあって、北は激しい決意をし、眼を再び日本に向ける。「…自分は十有余年間の支那革命に与かれる生活を一擲して日本に帰る決意を固めた。十数年間にとくに加速度的に腐敗堕落した本国をあのままにして置いては、対世界策も対支策も本国そのものも明らかに破滅であると見た。

「そうだ、日本に帰ろう。日本の魂のドン底から覆えして日本みずからの革命に当ろう。」かくて、「革命帝国の骨格構成の略図」「日本改造法案大綱」を断食しつつ、つくりあげた。そこへ、「老壮会」から派遣された大川周明が、上海まで北をむかえに来る。両雄の出会いは大正八年暮。北は、翌年一月に帰国。

これ以後の北一輝は「法案」の著者としてファシズム運動のカリマス的指導者であって、日常生活は法華経の行者に近く、個々の運動局面では、彼の弟子である、西田、岩田、清水、辰川、大杉精一らが表面に出て活動した。辛亥革命の失敗と宋教仁の死から、日本に追放されるまでの北の深刻な挫折感は、政治世界を相対化し、宗教人に自己を近づけ、ことに、日蓮の影がその生活を横切ると思われる程に、苛烈なものがあった。北の行動の不可解な、謎めいたところが生ずるのは、ことごとくこの頃からである。以後、盟友としては、大川、西田らができるが宋教仁との関係ほどでなく運動としての国家改造運動にはもとより、中国の革命運動ほどにコミットしていない。ただ、政界の裏面にあって、時折事件をまきおこした「黒幕」であったにすぎなかったのである。この北の思想は、一般には、三つの著書の主張の一貫性をたどってみたり「国体論」と「法案」の政治思想における重要な相違が指摘されたりして、徐々に明らかにされつつある。一貫しているのは、誰もがいうように、国内的には民主化の推進による階級の打破、対外的には資源の平等化の主張である。また、変化したのは、この主張の方法、手段であって、議会と普選の重要視から、軍隊によるクーデタに変る。北が、中国革命の体験によって、軍事問題に必然にぶつかり、軍隊なくして革命なしの結論をえる過程は、「支那革命外史」にくわしく述べられている。この「外史」は、単に北の革命体験のみならず、日中関係論、革命論、中国論としてもすぐれた考察をふくみ、現在でも、すぐれてアクチュアルである。北の思想が、実践的な特長をもち、したがって、実践の過程で思想的エネルギーを樹液のように吸いこみ、その理論化において、再度実践を示唆するという、あたかも、毛沢東のテーゼを思わせる思考方法が、「外史」に、あざやかにあらわれている。現実を変革しうる理論の所有者が、必然としてたどる思惟の運動過程であるとはいえ、かかる理論家は、日本の革命者の中では数少い。北を、「一貫不惑」の社会主義者と考える場合は、「国体論」「外史」「法案」を、一体として、とらえねばならない。また、社会主義者として出発し、ファシストとして死んだと考える場合は、普選と啓蒙運動の呼びかけから「国家ハマタ国家自身ノ発達ノ結果他ニ不法ノ大領土ヲ独占シテ人類共存ノ天道ヲ無視スル者ニ対シテ戦争ヲ開始スルノ権利ヲ有ス」という主張の変化を重視せねばならないだろう。問題のポイントは、やはり、国家と天皇制をめぐる、日本の社会構造との対応にあると思われる。北は「国体論」において、すでに、国家を否定する堺ら、当時の社会主義者を激しく批判し、国家を肯定している。同時に、日本の国体論と天皇絶対主義も激しく批判した。合理的な機関説と国家有機体的発想の結合。天皇制は後進国家の近代世界への登場の土着的シンボルである。しかるにこの後進国家が帝国主義国となり、対外的侵略と弱少民族の抑圧、植民地化を推進する時、この土着的シンボルは、当然にも、国家の絶対制を規定するイデオロギー的基盤となり、ついには、国家の進出は、天皇個人のため、ということになる。このような倒錯が、近代日本の発展過程でなされ、また、大衆の意識もかかる倒錯を、長い時間をかけてたどった。本来後進社会の特長である、先進国の文化をそのままわがものとする、プチインテリは、この過程で、大衆的情況から排除され、帝国主義国家に内在せる伝統的土着的思想の所有者が、影響力をふるう。明治社会主義者や昭和共産主義者の命運は、この過程に無自覚であることで、すでに定っていた。前者の一翼であった北一輝が、その生命とともに思想をも長らく持ちえたのはその処女作の国体論批判があまりに徹底的であった故に、人より早く国家権力の追放を味ったからであるといえよう北は機関説をとりいれつつも国家主義を堅持していたし独自の日露戦争評価とインターナショナル批判の判断力をもっていた。そうして日本において社会主義者としての理論活動が不可能であることを知った時、同じアジアの後進社会である中国の革命運動の実践に入り、ここで、より強力な文化の伝統を持つ社会にあって、孫文らの英米型政治思想が大衆的情況から遊離して実践力を持たぬ姿を、銘記したのであった。その後に、すでに帝国主義国家として列強の一翼にくい込んでいた日本に北が帰った時国家主義は神がかり的天皇主義者となり、昭和に入るや北とその後継の差異は、大なるものとなったが、民主化と対外進出では一致し、ついに「二・二六」に至った。

（大学院博士課程・日本政治思想史）

北一輝

一八八三年佐渡に生まれる。中国革命同盟会に参加。その後猶存社を結成、右翼運動に乗り出す。二・二六事件の背後の首謀者として逮捕され、一九三七年に処刑される。主な著書に「国体論及び純正社会主義」「支那革命外史」「日本改造法案大綱」。